

岸本尚毅 選

【特選】

わが畑へ誰か来てゐる野分あと

神奈川 二村結季

【優秀】

絵の時計とけてこの世の暑さかな

神奈川 百田登起枝

除染袋葛吐いて葉のひるがへる

福島 永瀬十悟

呼べば来る雲ありさうな小春かな

東京 小野姫路子

【秀逸】

明日から海が相手や卒業す

香川 森本添水

栗の木を圧し折る猪を許すまじ

広島 藤田みちこ

檣頭に社旗翻る帰燕の日

大阪 碓 天牛

怨霊を恐れ定家や歌かるた

東京 堀口泰司

米寿の母化粧品買ふ初紅葉

愛媛 古谷久代

初鳩の集まってくる彼は神

宮城 小田島 渚

【佳作】

だありんと呼びし君逝く蟬時雨 静岡 小林としお

秋簾一枚に足る露天の湯 岩手 片方みち子

的確な手すりの位置や小鳥来る 宮城 山崎清美

さるばと並べて吊す唐辛子 岩手 沼里恵美

長き夜の目覚めは夫の足温し 福井 中田良一

秋蟬の搦め捕らるる声ならん 鳥取 中村襄介

長き夜やお前誰かとまた聞かれ 宮城 山内伸一

釣瓶落し火の鳥須臾を高窓に 広島 柴田南海子

卓ひとつ籐椅子ふたつ秋深し 青森 郡川宏一

鉦叩減塩醤油ひとしづく 千葉 津高里永子

神野紗希 選

【特選】

泣きさうな月出る薄羽蜉蝣に 埼玉 後藤 章

【優秀】

弔鐘に雲の割れゆく忘草 東京 石井きき

雨兆す雑草園の粟茸よ 岩手 及川浩子

鉛筆に年輪の端雁渡る 宮城 佐藤みね

【秀逸】

サボテンは炎天が好き棘光る

三重 宇留田敬子

みちのくの巖のごときこの残暑

岩手 小菅白藤

鉄・非鉄買取します金風も

栃木 森 青荀

除染袋葛吐いて葉のひるがへる

福島 永瀬十悟

合歓の葉は疾うに眠れりはた神

宮城 土屋遊蛸

日焼の子首も据はらぬ弟抱く

愛媛 古谷久代

【佳作】

天の川ぐるぐると吾は回遊魚 奈良 堀ノ内和夫

夏幾つ越せる命ぞ古書縛る 静岡 金子 徹

絵の時計とけてこの世の暑さかな 神奈川 百田登起枝

鞆から覗いてをりし扇風機 大阪 大島幸男

名をもらふ赤子の眠り小鳥くる 福井 伊藤秀雄

透明ナテント有マス星月夜 岩手 菅野啓子

赤ちゃんどうしさわりたがって初月夜 岡山 藤井美琴

かなかなやアボカドねぢる婚指輪 宮城 佐々木博子

夫病めば青柿にある雨滴かな 宮城 小林里子

終戦日のサイレン僕はピアスの耳で聞く 東京 林 喜久子

阪西敦子 選

【特選】

裏木戸を開けるや萩の降りかかる

東京 佐藤稲子

【優秀】

向日葵の下の給食袋かな

香川 涼野海音

椋鳥の先々騒ぐ朝かな

岩手 深澤洋子

飼ひ猫に土の匂へる残暑かな

山形 桃谷 翔

【秀逸】

交番の張り紙減りし赤とんぼ

東京 若林ふさ子

除染袋葛吐いて葉のひるがへる

福島 永瀬十悟

カナリアが鳴かなくなつた竹の春

岩手 畠山えつ子

仔犬にも遠吠えのあり鯛雲

岩手 田辺厚正

赤ちゃんどうしさわりたがって初月夜

岡山 藤井美琴

大仏の俯く先のすすきかな

東京 櫻井祥香

【佳作】

やけくそのやうな花火のあとの闇 埼玉 中村暢夫

大早梅千二つ弁当に 広島 藤田みちこ

暑き日の風の抜けゆく荒物屋 岩手 沼宮内凌子

デイケアの車の止めてある冬日 愛媛 山内ひでやん

蓮の実の飛んで肺がん検診車 宮城 永野シン

天高しベンチに一人ゆで玉子 宮城 黒河内玉枝

宅配に出る十葉の匂う手で 宮城 遠藤 蓉

砥石ひとつ夕陽に置かれ敗戦日 群馬 あべあつこ

ペンギンはきつとあのまま星月夜 東京 山月 恍

焼けば反る魚の眼や大夕焼 岡山 小西瞬夏

照井翠 選

【特選】

水漬く地の闇の寝返る虫しぐれ

栃木 中井洋子

【優秀】

除染袋葛吐いて葉のひるがへる

福島 永瀬十悟

夜気水のやうな月下に蝉生る

栃木 龍 太一

砥石ひとつ夕陽に置かれ敗戦日

群馬 あべあつこ

【秀逸】

十字架に方寸の錆昼の虫

静岡 野畑明子

八月の空とけのこる白い月

宮城 菅原榮子

野分だつ短気をおこさねば良いが

岩手 田辺厚正

銀漢が牛の寝息に入り込む

宮城 土見敬志郎

青春は素足の記憶風立ちぬ

宮城 佐藤成之

小鳥来る空より遠い明日から

埼玉 乾 佐伎

【佳作】

片恋の瞳の中の晩夏かな 宮城 渡辺 徹

杜なさぬ被災の社虫集く 宮城 佐野享保

クラッチを切つて芒の風に乗る 宮城 林 静江

余白なき志功の葉書雲の峰 岩手 和田タケ

寒月に眠る駱駝の毛の長し 東京 遠藤玲奈

おごられて礼言ひ忘れ心太 東京 大久保白村

地下街は光の母船何時か秋 宮城 土屋遊蛭

呼べば来る雲ありさうな小春かな 東京 小野姫路子

最果ての花野に風の休みなく 東京 田中かんな

いつさいが夕焼けとなる故郷かな 岡山 小西瞬夏

成田一子 選

【特選】

秋蝶は腕のうぶ毛にふれたがる

神奈川 あべたかし

【優秀】

明日から海が相手や卒業す

香川 森本添水

鮭の墓碑めきて番屋の傾ぎけり

東京 古矢敏光

子に問へば日傘の人が来たといふ

埼玉 戸矢一斗

【秀逸】

月代やよき挨拶におみょうにち

宮城 大沼せつ子

木も石もカムイなるべし秋の声

栃木 森 青葡萄

少年や渋民駅の秋入日

岩手 沼宮内凌子

森を出て森の昏さの秋の蝶

岩手 名久井清流

白絵具のやうに緊張障子貼る

宮城 芳賀翅子

幸福論オクラのうぶ毛きらきらす

岡山 小西瞬夏

【佳作】

さるぼぼと並べて吊す唐辛子 岩手 沼里恵美

出入口暗き質屋の花八つ手 埼玉 櫻井俊治

忙しさは生きる力と稲穂手に 福島 渡辺民子

かなかなや旅の絵皿の焼きあがる 東京 齊藤保志

石窟の一つは廁著莪の花 宮城 丸山みづほ

おづおづと自首するやうに冬に入る 東京 川崎真樹子

みちのくのしづかな雨や零余子落つ 岩手 池内雅一

カルピスといとこと甥と甲虫 石川 燕北人空

鬼灯の赤らむ街の昏さかな 東京 藤井祐喜

鉦叩減塩醤油ひとしづく 千葉 津高里永子